
真祖の吸血鬼と業炎の剣帝～転生したネギま！での俺の戦記～

ぱつつかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真祖の吸血鬼と業炎の剣帝～転生したネギま！での俺の戦記～

【Zコード】

N7176N

【作者名】

ぱつつあん

【あらすじ】

神の手違いにより殺された俺はお約束通りに転生をせられることになつた。しかも転生先はネギま！の世界と来た……。はあ……あんなバグキャラ共のなかで俺は生き残れるのだろうか……。真祖の吸血鬼の力を持っているが、そこそここの力しか持つていらない主人公は生きていけるのか！？しかし成長度はネギを凌駕する！？……かもしれない。この話は主人公がしつかり修行して最強（？）になる物語です。現在、リメイク中です

■ 20『ハロローグ』（前書き）

現在文章といふべきの修正中なので、変なといふがありますが、
ご了承ください。

エピソード『プロローグ』

気がつけば俺はどこかで分からぬ眞っ白な空間に立っていた。
あれ？ なんで俺つてばこんなところに居るんだ？

良く分からないから、とりあえずさつきまで何をやっていたかを、
思い出すことにしよう。

えつと……確か俺はさつきまで普通のつまらない人生を送つてた
はずだ。

なぜ学校に行かねばならんのだ、とか学生ならば有りそな不満
を抱えながら、俺は登校してたはず。

で、ノロノロ歩いてたらなんか後ろからトラックが突っ込んで
て、それからの記憶がさっぱりない……あれ？ 俺死んだ！？
嘘だろ……？ 俺はまだやりたいことが……特になないな。なら
いか。

とりあえず開き直つた俺は、ここがドンのかを把握するために、
周りを見渡した。

右、異常なし。
左、異常なし。
後、異常なし。

前、白髪のオッサンが土下座している。

だれ？ このオッサン？

何このオッサン？ もしかしてあれか、踏んでくださいって言つ
仕草か？

「大変もうしわけありませんでした

つ……」

そんなコトを考えているとオッサンがいきなり叫びやがった。
一体なにがどうしたってんだよ。

理由がわからない俺はとりあえず田の前にいるオッサンに話しかけてみることにした。

「あの、何をそんなに謝つてるんだ？」

「えっと、その……あの、じ、実は……その」

何をそんなに言つたりやつたりしているのかは分からんが、なにやら嫌な予感がするな。

つーか良い歳こじてどもつてんじやねえよ。

そしてようやく説明しだしたかと思ったのだが、オッサンの口から出した言葉はとてもショックキングだった。

「つまりなんだ、ほんとはトライックに潰されて死ぬはずだったのは、他の奴なのに、あなたの手違いで俺が死んだと？」

「…………」

「で、アンタは世界を監視する神様と言つわけだな」

「…………」

……この自称神様のオッサンぶち殺していいかな。
何が手違いで死んだだ。ふざけんのもほどほどいやがれ。

「俺はこれからどうなるんだ？」

「とりあえずネギまーの世界に転生してもうつかの」

「…………は？」

今なんつった？ ネギまーの世界に転生？

ふざけんなよ。あんなバグキャラ満載のとんでも世界に転生だと？
そんなとこに転生したってすぐに死ぬだけじゃねえか。

「その点は大丈夫じゃ。主にはわしから力を与えるから」

とりあえず俺の心を読んだことは置いといて、これで死ぬ」とは
なくなる…………のか？

「で、どんな能力を俺につけてくれるんだ？」

「つむ、主には真祖の吸血鬼の力を『えよつ』

「一」とはエウカト・ンジ・ローンと回じド不老不死になぬハツハツと
か。

まあ、これなら死ぬ心配はなくなつたな。

「で、あとはどんな力をくれるんだ」

「えつ？」

えつ？ ジャねえよクソジジイ。

真祖の吸血鬼の力もつても他になんかないと戦えねえだろうが。
あんなとんでも世界にとばされて戦わないつうことは、絶対に
ありえんからな。

「ほかの力だよ、ほかの力」

「えつと…………うん…………それじゃあ…………魔力と氣をぼびぼびに『えよ
う』

ほびほびにか。まあ、原作に介入しなきゃバグキャラビもと戦う
わけじやないし、ある程度自分の身を守れればいいからな。

「じゃあそれでいいからなんか武器をくれ」

なんか厚かましいけど殺されたんだからこれくらいこしても「わな
きやな。

つーか魔力も氣もほどほどじやあ、戦えないだろ。
使い方もさつぱり分からないしな。

「武器か……。ならこれを使ひつ」

そう言つて自称神様が俺に渡してきたのはなんとも馬鹿でかい両刃の剣だった。

おい、俺、剣なんか使えないんだけど。

「大丈夫じゃ。修行のために原作の200年前にとばすからの」「は？」

いきなり一百年前に飛ばすとか言つてたけど、まさかそこで鍛えろつてじゃねえだろうな？

ふざけんなよ、テメエ勝手に俺を殺したんだからチートパワー寄越せよ。

「では行くかの」

「おい、ちよつ、待て！！」

と、俺が言つてるんだが俺の下に穴が出てきた。

「行つてくるのじゃーーー！」

「人の話をきけ

つーーー！」

俺の叫びも虚しく俺はこの穴に落ちていってしまった。

拝啓 お母様

今更ですが先を旅立つことをお許しください。
息子の龍崎桜牙より。

エドワード・ブロードリッジ『後書き』

感想待っています！

エピ1『炎、転生アリ』（前書き）

この度、この小説をリメイクすることにしました。
さらに話の大筋も変更することにしました。
改訂版の第一話となります。
では、どうぞ！！

田に入る太陽の光、その独特的の温かさをその身に受けた俺は田を覚ました。

体を起こして周りを見渡すと、そこは断崖絶壁、樹に囲まれた森の中に俺は寝ていた。

あと少しでも落ちるといひがずれていたら、といひ恐怖を覚えながら、俺は起き上がる。

拳を開いたり閉じたりして、体の調子を確かめたといひ、転生させてもらひ前と変わりなく動かすことが出来た。

……いや。むしろ体が軽くなつて、前よりも動きやすくなつたかもしねれない。

(体が『ハイディライト・ウォーカー真祖の吸血鬼』になつた影響か……?)

原作じゃあ、ハイディライト・ウォーカー真祖の吸血鬼と人間の差を説明してなかつたから、実際はよく分からんんだけど……。

まあ、見た目が幼女のエヴァンジェリンがあそこまで動けるんだから、いくらか肉体の補正が成されてるんだと思うんだけどな。しかも真祖の吸血鬼は不老不死、つまりは肉体が成長しないってことは、やっぱりそうなんだろうなあ。

そんなことを思いながら、俺は周りを見渡す。

すると俺はある物を発見した。

俺の身の丈ほどもある両刃の大剣。見るからに『炎』を冠するような姿に、俺は思わず息を呑む。焼きつくされるというか、呑み込まれるような感覚に、俺は不安を覚える。

体がハイディライト・ウォーカー真祖の吸血鬼になつた影響だからだろうか? この大剣の強

さが何となくだけど分かる。

(こんなスゲー剣貰つたつて、今の俺に使えるわけねーじゃん)

肉体は最強でも、それを使つてる俺自身は最弱なんだから、宝の持ち腐れじゃんか。

余りの大剣の強さに内心で呆れながら、俺は柄に手を伸ばした。だがその瞬間。大剣から炎が発せられ、まるで俺に触られるのを拒むかのように反撃してきた。

ギリギリで手を引っ込めて横に転がつて逃げたからいいけど、そうしなかつたら俺は確実に焼かれていた。

放たれた炎は後ろにあつた岩に直撃し、ドロドロに溶かしていたのを見ると、かなりの熱量だといつことが容易に理解できた。

(あ、危ねー……。危うく焼死するといだつたじゃねえか……)

せつかく転生したつてのに、こんな下らねえことで死んじまつたら洒落にならねえつうの。

しかも不老不死で死ねないからあの炎で焼かれてる間、俺は氣絶するしか痛みを遮断できないってことだ。

あの神様、なんつー代物を俺に寄越してんだよ。確かに武器を寄せつて言つたのは俺だけどさ。

(ん? なんだ、アレ……)

大剣の近くには一つのケースが置かれていた。

多分、あの大剣の近くに置いてあるつてことは、神様が用意してくれたモノだつてことなんだろう。

俺は大剣に触れないようにしながら、そのケースを手にとり、中身を確認してみる。

中には一通の手紙と、一対のグローブが入っていた。

俺はケースの中から手紙だけを取り出し、中身を読む。

『お主がこの手紙を読んでいる頃、儂は亡き者となつて……はいな
いから安心しておけ。

さて、まずお主がいる場所はどの地図にも乗つていない魔獸の秘
境じや。

そこにはかなりの数の魔獸があり、修業にはもつてこいの場所じ
や。

お主がある程度力をつけ、そこにある大剣「レーヴァテイン」の
炎を使いこなせるようにならねば、周りに張つてある結界が破壊で
きぬから死ぬ氣で修業するのじやぞ?』

シツ『ハハハハがたくさんあるんだが、とつあえず言わせてもら
おつ。

独学で鍛えろって無理がありすぎるんじやねえのか?

どんなに強い奴だつて教えてくれる奴がいるから強くなるわけで、
一人で強くなれる奴なんてそれこそ才能がある奴だから出来ること
だろうが。

ついでにレーヴァテインだつけ? それを使いこなせるまでの
森から出れないって……。

しかも魔獸の森だと?

俺はアレ使えるよつになるまで何回死にやうにならないといけ
ないんだろうか……。

『次はグローブについてじや。

そのグローブは「レクスグローブ」とい、「レーヴァテイン」
の炎をつけている間のみ、拳にだけ操れるよつになる代物じや。

しかもそれをつけている場合、「レーヴァテイン」の炎に精神を
汚染され、凶暴的になるから気を付けるのじやぞ?

そうせねばすぐに氣絶してしまつからう。

今のお主だと精々五分が闇の山じゅろうが、鍛えれば制限なしで扱えるよつになるじゅろう。

では、頑張るのじや。それではな』

神様の手紙を読み終えた俺は、ケースと一緒に入っていた『レクスグローブ』とやらを手にしてみる。

甲の部分には『L』と刻まれている。

甲に書かれているのはレクスグローブの『L』なのか。

しかもこのグローブ、レーヴァテインの炎を操れるよつになるのか。

そんなことを思いながら、レクスグローブを手につける。

すると、装着したレクスグローブからかなりの量の炎が放出され、俺の意識が徐々に凶暴的になっていくのが分かつた。

「オオオオオオオツ！…！」

レクスグローブから放出された炎が拳に集束していき、その炎が集束した拳で近くにあつた大木を殴り付けていた。

するとどうだろう。あれだけの太さの大木の殴られたところが一瞬にして焼失していた。

しかも迷惑なことに、このレクスグローブを装着してから体が勝手に動いて、自分の意思で止められないじやねえか。

そして疲れだすこと約四分後、俺の意識は強制的にブラックアウトしていった。

そんな中、俺は思った。

「こんなで生き残れるのだろうか、つてな。

EP01『炎、転生する』（後書き）

今回リメイクしたいと思ったのは、こちらのヒロでの最初の作品を完結させたいと思ったからです。

投稿はあくまでも「狙撃手」がメインなので、更新は遅くなると思いますがよしくお願いします！！

感想待っています！！

Ep2『炎、決意する』（前書き）

早くもリメイク版一話投稿です。
では、どうぞ…！

レクスグローブを使って気絶してから約数時間後、目を覚ました俺は重大なことに気付いてしまった。

まず、『ハイディライト・ウォーカー真祖の吸血鬼』なので死ぬことは絶対に有り得ないが、腹が減るということには変わりない。

いざ飯を食おうとしても、食材も調理するものも全くななく、さらには周りには食えそうな木の実もキノコもあるわけでもない。この森をくまなく散策すればどこかに食えそうなモノがあるだろうが、その場合には更なる問題が浮き上がってくる。

（魔獣と出会したら……どうなるんですか？）

そう。魔獣と出会したらどうなるんだ、ということだ。

神様の言つてることが本当なのだとしたら、この森には魔獣がうじゃうじゃいることになる。

木の実やキノコを探してゐる間に見つからない、なんていう保証はないだろ？

見つかってしまえば最悪の場合、いきなり魔獣と戦う羽目になる。……『冗談じゃない。確かに生き残るために強くなりたいって思うたさ。

だけど、なんでこんな一方的にこんなことをさせられないといけないんだよ。

勝手に殺されて、不老不死の力と大層な大剣貰つてはいいが、戦いなんて知らないド素人がこんな場所に放り込まれて生き残れるはずないじゃんか……。

「くそつ、神様は……そこまで俺が嫌いか……？」

俺は知らず知らずの内に握りしめていた拳を、近くにあつた木に打ち付けていた。

これが夢であつてほしいと思つたけど、拳を駆け抜ける痛みはまさに本物の痛みだ。

それに、怪我をしたのにその傷がすぐに再生していく。

そう言えば俺、人間やめたんだつけ。

改めて考えてみると、我ながらなんてバカなことをしたんだと思う。

別にチートな力を貰わなくとも、『魔法先生ネギま!』の世界に転生することになったとしても、戦わない普通の日常を過ごせたんじゃないかと思う。

でもさ、仕方のないことだつたんだ。

殺されたことには確かに抑えきれない怒りが内心であつたことは確かだ。

だけど、それ以上に憧れたんだ。

マンガの世界の住人と触れあうこと。そして、主人公になつてみたいつてことに。

誰しも一回くらいは、主人公になつてみたいてことを思うときがあるだろう。

それは、俺も例外じゃなかつたつてことだ。

(俺……本当にバカだ)

主人公になれるチャンスに飛び付いて、チャンスをモノにしたはいいけど、戦いを前にしたら腰が抜けてる。

しつかり考えたら分かつたはずだ。

自分が主人公なんかになれるはずがなかつたつてことくらい。

殴り付けた木を背凭れにするように、俺は尻餅をつく。

空腹感なんてどうでもいい。今はただ、この虚無感をどうにかし

たい。

俺は、そんなことを思いながら目を閉じた。

「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ！――――！」

だが、すぐに目を開けることとなつた。

今まで聞いたことがないような、余りにも人間からかけ離れ、どちらかと言えば獣の叫び声に聞こえるような耳障りな声。

発信源は上。目を開けて咄嗟に捉えたものは、俺を今にも補食せんとする鷹竜の姿（ケコフイシンドラゴン）だった。

食われる、逃げなくちゃなんて考える前に、俺は無様な叫び声をあげながらその場から逃げ出していた。

その時にレクスグローブとレーヴァテインを忘れなかつただけ奇跡に思える。

恐怖で一瞬だけ硬直した俺を動かしているのは、『死にたくない』という人間だつた頃の本能だけだ。

戦えば勝てる？ 論外だ。

レクスグローブを使えば？ 勝てる保証はどこにもない。

レーヴァテインは？ そもそも今の俺には使えない。

そうだ、俺には『逃げる』という選択肢しかないんだ。

こんな殺し殺される世界に身を投じた以上、弱いヤツから死んでいく。

俺みたいな弱者から。

「うわつ！？」

とてもじゃないが今の俺じゃ逃げ切れない。

鷹竜の放ってきた鎌鼬ブレスが、近くの木にあたつて粉々に粉碎

しているのが見えた。

その余波で吹き飛ばされそうになるが、本能的にそれはダメだと悟り、何とか踏み止まる。

逃げる。いったいどれだけの間逃げ続けなければならぬのかは分からぬ。

だけど、死にたくない以上は逃げるしかないんだ。

不意に世界が回り始めた。いや、元々回つてゐるけどさうじやない。視界で捉えられないくらい速く回つてゐるんだ。

(違う……。俺が回つてゐる……ー?)

自分でもこんな冷静に考えられたことに驚いてる。世界が速く回らない以上、こうとしか考えられない。

そして何故自分が回つてているかを考える前に、今まで経験したことのない激痛が俺の体を襲つた。

最早叫び声を挙げることすらも出来ない。

いつたい、いつやられたのかは分からぬ。けど、確かに俺は鷹竜の鎌鼬ブレスに巻き込まれたんだ。

目線の先には俺の左腕が転がつてゐる。さつきので千切られたに違ひない。

余りの痛みに痛覚が麻痺してしまつたのか、さつきの激痛はもう感じない。

血が抜けて大分冷静になつたのか、それとも開き直つたのかは定かじやない。

しかしそれでも、まだ冷静に生き残るために逃げることが出来る。

(いいで使えない、いつ使うんだー!ー)

片方のレクスグローブを填めて、右手にレーヴァテインの炎を灯す。

一瞬でいい、一瞬だけでいいんだ。

この炎で、鷹竜の意識を俺以外の標的から外すことが出来さえすればいいんだ。

妙に冷静だななどと自己分析しながら、右手に宿った炎を鷹竜の真上に向かつて、『投げるイメージ』で放つ。

鷹竜には人間並みの知性がなかつたのか、動く対象を無意識に目で追つっていた。

これだけでいい。あとはなるようになる。

俺は近くの崖から身を投げる。もちろん、下に川があることは確認済みだ。

そこで、俺は意識を失つた。

「ん……」

頬に何かが当たり、俺は目を覚ました。

既に夜空は真っ暗で、俺が気絶する前は昼だつたことを考えると、少なくとも五時間以上は気絶していたことになる。

落ちた先が川で、水が緩衝材代わりになつたから何とか死なずに済んでいる。

……まあ、不老不死だから死ねないんだけどな。

なんで沖に打ち上げられていたかは分からぬけど、起きたら魔獣の腹の中だつたなんてことにならなくて良かつた。

さつきの鷹竜の鎌鼬ブレスに切り飛ばされた左腕も生えてきてるし、何の違和感もない。

唯一、こつちに来るときに来たままだつた制服の左肩からがなくなつてゐるけど、それだけで済んで良かつた。

(……少し動くだけで一々こうなつてたんじゃ、命がいくつあって

も足りない）

しかも強くなつてレー、ヴァ テインを使いこなせるようになると、この森から出れないって手紙に書いてあつたしな。

嘘かもしれないが、多分本当のことなんだろう。

結局。俺はもう強くなるしか生き延びる方法はないし、この森から出る術もない。

神様とやらの間違いで勝手に殺されて、その擧げ句に強くなまるまで死にそうな毎日が続く。

恨んでも恨みきれねえ。恨んで強くなれるんだつたら俺はいくつでも恨んでやる。

だけど、恨んだつて強くなれるわけじやねえんだ。

（強くなつてやる……。強くなつて、絶対生き延びる……）

俺は改めて決意する。

生半可なことじやダメだ。やるなら本氣で、死ぬ氣で特訓して強くなるしかないんだ。

だけど、一つだけ気にあることがある。

（いつたい誰が、俺を川から助けてくれたんだ？）

川にほとんど流れがないってことは、勝手に沖に打ち上げられるなんてことはない。

少なくとも誰かが俺を助けてくれたことになる。

……この森には、俺以外にも誰かがいるのか？
生温い風が、俺の頬を撫でた。

Ep2 『炎、決意する』（後書き）

無意味なフラグを立ててしまつた……。

これで早くも新しいオリキャラ登場フラグが立ちましたねww
次回から修業に入ります！！

まあ、修業といつても最初ですから地味になりますがww
では、感想待つてます！！

リメイク版第三話！！

狙撃手の方の『火のボ編』の執筆が長すぎてしまつちがかなり短い……。
まあ、そのうち長くなるでしょうww
では、どうぞ！！

あれから夜が明け、近くにあつた木の実やキノコを焼いて食つた朝食を済ませた俺は、さつそく特訓を始めることにした。
とはいへ、実際に何をすればいいか分からなかつた俺は、寝る間を惜しんで（魔獣が来るのが怖くて寝れなかつたのもあるが……）今までのことを思い返していた。

まず、俺はこの世界に来てから『レクスグローブ』と『レーヴァテイン』を手に入れた。

レクスグローブはレー、ヴァテインの炎を一時的に操れるようになる代物で、使えばたつたの五分で気絶してしまつという欠陥がある。しかも使つている間は『炎』の象徴というべきか、燃え盛るかの如く性格が狂暴的になるおまけ付きだ。

その五分が過ぎた後は筋肉痛で体がメチャクチャ痛いのを記しておこう。

筋肉痛になるということは、レクスグローブを使ったときの状態仮に『狂化』と呼ぶに俺の体力がついていけないってことだ。

つまり俺が今からやることは、技を使えるようにすることでもない。炎を扱えるようにすることでもない。

「レクスグローブの『狂化』に体力を対応させること……」

そうしなければレクスグローブを使ったときにたつた五分で気絶して、戦うどころじやなくなるからだ。

炎を扱えるようにするのは、レクスグローブの『狂化』に耐えきれるようになつてからの話だ。

最初にやることが決まった以上、早速行動に移すしかない。

物事に近道なんてのはないが、腕立てや走り込みで体力をつけても、常に死ぬ気で出来ていない以上、どこかで甘さが出てくる。それじゃ駄目なんだ。それじゃ……強くはなれない。

どうせ死なない肉体なら、本當だつたら死ぬくらいの特訓をしないと意味がない。

正直にいえば怖い。それでも、毎日をビクビクしながら生きていくのなんか真つ平御免だ。

その考えの果てに行き着いたのがここだ。

「崖登り……。補助もなしで登るのなんか、余程のバカか命知らずぐらいだらうな……」

上を見上げれば、およそ一〇〇メートルぐらいの先に、よつやく崖の終わりが見える。

ここを息切れしないで登りきるだけの体力がつけば、まずレクスグローブの『狂化』に振り回されるなんてことはなくなるはずだ。確証なんてものはないんだけどな。

事前に持つてきていたレクスグローブを見つめる。

レクスグローブを装着して登れば、身体能力を向上させたまま無理な運動をやらせることが出来るため、体力の向上は早く出来るはずだ。

だが、それじゃあ五分が限界だ。五分が過ぎたら気絶して登つた高さから真っ逆さまだ。

逆にレクスグローブをつけなかつたら今ある体力のみで、登るためかなりの時間がかかる。

じっくりとしっかりとした体力付けが出来る。

「……どつちを選ぶかなんて、決まつてんじやん」

レクスグローブを使えるようになるために体力をつけるんだから、

レクスグローブをつけたままやつた方がいいに決まってる。

一回の深呼吸の後、俺はレクスグローブを両手に装着する。

レーヴァテインの炎がレクスグローブに宿り、性格が狂暴的になつていくのが分かる。

何故レーヴァテインの炎を扱えるようにする、このレクスグローブを使うとこのように狂暴的になるのか……。

詳しいことは分からぬが、おそらくはレーヴァテインの炎を扱えていなく、レクスグローブに籠められた少量の炎が体内で暴れているためなんだろう。

「ウオオオオオオオオツツツ！－！－！－！」

普段の俺なら言わなそうな雄叫びをあげながら、俺は崖を登り上がつていいく。

崖を登るのも『狂化』しているとはいえかなり辛い。

身体能力が上がっているとはいえ、あくまでも現在の俺の身体能力より上がっているだけだ。

そんなに目にも止まらない速さで登ることなんて出来ない。

一点に留まらず、すぐに他の点に移動しなくては落下してしまつ。それを『狂化』していると本能的に悟る『直感』があるために、体が勝手に動いている。

どちらかといえば、レーヴァテインの炎に動かされているといった方が正しいかもしない。

何てことを考へてゐるうちに五分が経過したんだろう。

レクスグローブの炎が消えて、意識が急激に薄れていくのが分かつた。

『狂化』して登つた高さはおよそ三十一メートルほど。

だが、このまま頭から落下したら間違ひなく肉塊ミンチだ。再生するからつて、そんな理由で簡単に落下したくない。

(やべつ…………本当に…………死ぬ…………)

薄れしていく意識の中で、俺は何とかそれを阻止しようと何かを掴もうとする。

しかし、周りには掴めそうなものは何もない。
ジェットコースターを降りるときはまた違つて浮遊感を感じながら、俺は必死にもがく。

仕方ねえな、これで貸しーだぜ?

完全に意識がなくなりそうになる直前、そんな女性特有の声が聞こえてきて、温かい何かに包まれる感覚を感じ、完全に意識を失つた。

……誰の声だつたんだ、あれは。

俺が目を覚まして最初に思ったことはそれだつた。

この森には俺の他にも人間がいるかもしれないというのは分かつていてが、わざわざ助けてくれるとは思わない。

体に疲れがないところをみると落下はしてなかつたようで、やつぱり助けてもらつたとしか思えない。

でも、周りには誰の人影もない。

「…………」

しかもこれは何なんだ?

目の前には明らかに人の手で作られた焼き魚が用意されており、いかにも怪しい感じがする。

それでも空腹には逆らえずに、俺は焼き魚を手にとり、口に運ぶ。

「……美味しい」

普通に美味かつた。

あれ？ 別に罠が仕掛けられてる様子もないし、普通の焼き魚なんだけど……。

いつたいどこの誰が、俺みたいな馬の骨に食料を用意してくれたんだ？

よく分からぬんだが、この焼き魚を用意してくれた人に感謝しよう。もちろん神様なんぞには絶対エに感謝しねえ。

用意されていた焼き魚を食し、立ち上がる。

ふと、視線を傾けるとあるモノが目に入った。

「なんでコレがここにあるんだ……？」

何故か神様に貰つて大剣、レーヴァテインが木に立て掛けた。

おかしいな……。レーヴァテインはレクスグローブをつけてないと掴めないから、一番最初に落ちた場所に置きっぱなしのはずだったんだが……。

まさか勝手に動き出したのか？ 何てことがあるはずがないか。じゃあこの焼き魚を用意してくれたヤツが持つてくれたとでもいうのか？

「有り得ない……。もしそうだとしたら、レーヴァテインに認められたってことか……？」

レーヴァテインが使えるんだつたら、その人に是非とも特訓の師匠をしてもらいたい。

だけどその人はどこにもいないし、今は探している時間すらもな

い。

探してゐる暇があるんだつたら、レクスグローブを填めてもう一回登るか。

次は助かるなんて保証はないが、それでもやらないといけないんだ。

レクスグローブを再び両手に装着し、崖を登ることにした。

「はア……あいつも懲りねエな」

オレは木を背凭れの代わりにしながら、レクスグローブをつけて崖を登るあいつを見守る。

あんな使い方じや、すぐに炎がガス欠起こすに決まつてんじやん。レクスグローブを使うのに自分の体力を対応させることに気付いたのは良かったが、あんな修業の仕方じやいつになつてもそいつは使えないぜ？

むしろ死にそつになりすぎて、死ぬ氣で修業に取り組めなくなる。はあ……。今まで二回も助けたのに全然氣づいてねえし、こりや結構早めにオレが出てく必要があるな。

「まあ、もう少し自力で頑張りな。もう少ししたら助けてやるから

よオ」

オレは今にも崖から落ちそつになつてゐるヤツを見て呟き、もう一度ヤツを抱き抱えた。
やれやれ……。本当に懲りねエヤツだぜ。

早くも予定になかったオリキャラの登場フラグがWW
次回の更新は出来るだけ早くしたいと思います。
それと、出すオリキャラは前と違うかもしません。
あのキャラが出て、あのキャラが出ないというのがあります
了承ください。

また、せめて旧版のこのオリキャラだけは出して貰いたい
のがあつたら言ってください。
では、感想待っています！！

EP4『炎、魔事ナリ』（前書き）

旧式にいなかつた師匠オリキャラフ登場！！
では、どうぞ！！

「はあ……はあ……。くそ、まだ足りないのか……」

俺が修業を始めてから、早くも一週間が経過しようとしていた。
一週間つても時計があるわけじゃないから正確な時間は分からないから、日が落ちて日が昇つたら一日が経過したことにしている。

この一週間、俺はレクスグローブを装着して崖を登り、意識を失わないようにすることと、基本的な体力をつけることだけに集中していた。

馴れてきたからか、体力がついたからかは分からないが、レクスグローブに宿る炎が消えても気絶しなくなつた。

氣絶しなくなつたのはいいとして、炎が消えたら登つた位置から真つ逆さまというかなり危険な状況に陥つてしまつた。

昇りきるにしても上への距離はまだあるし、降りるにしても時間がかかる。たつた今降りてきたところだけど、案の定かなりの時間がかかってしまった。

（やつぱり、体力も何も足りない……。畜生、こんなんじやこつから出るもの無理だぞ……）

ここから出るには『レーヴァテイン』の炎を扱えるようになつて、この魔獣の森に張られてる結界を破らないといけない。

『レーヴァテイン』は愚かレクスグローブしらも扱えるようになつていない以上、出れるのに何十年かかるのやら……。

この一週間の間はどうしてかは分からぬが、魔獣と出くわさなかつたけど、これから先も出逢わない保証はない。

せめてレクスグローブを扱えるようになり、魔獣と戦えるようにならないと絶対に生き残れない。

「どうすればいいんだ……」

「のまま崖登りなんかやつたとしても、体力がつく前に魔獣に見つかって食われちまう。

体力の他にもレー・ヴァ・テインを扱うんだつたら、多分戦闘面に関しても修業をしないといけないのかもしね。

レクスグローブに宿る少量の炎すらも未だに扱えない。そうだったので、レー・ヴァ・テイン本体の炎を扱えるようになんてなれるはずがないじゃなか。

なんで……なんでこんな田に遇わないといけないんだ。

神に勝手に殺されて、勝手に転生させられることになつて、勝手に不老不死にされて、勝手にこんな危ない場所に送られた……。

俺が望んだ武器でさえ強くなければ扱えない代物だし、何もかもが神に勝手に決められたことだ。

どうして俺がこんな田に遇わないといけない。どうして俺はこんな場所に送られた。どうして俺を殺したんだよ……。

「もう嫌だ……」

俺は両手を投げ出してその場に横たわつた。

なんで前世は普通の学生で喧嘩をすることさえなかつたのに、いきなりこんな非常識なモノと戦わないといけないんだ。

戦いなんてしたくない。どうにでもなつちまえばいいんだ。

レクスグローブを放り出して、俺は空を見上げる。

あーあ。なんでこの空だけは転生後も転生前も同じなのに、俺だけはこんなにも変わつちまつたんだ。

主人公なんてもうどうでもいいし、俺は生きればそれでいい。

主人公

どうせ食われたって生きれるし、再生し続ける。

痛みを受け続けるのは、不老不死になつたときに決まつたことなんだ。

修業して強くなるか、何もしないでここにずっとこるか。どちらにしろ、俺の選択肢はどちらの地獄を選ぶかなんだ。もつ、俺は嫌なんだ。修業するのも、戦うのも。

「甘つたれてんじゃねェぞ、そんなことどこかと思つてるのか？」
「……誰だよ、アンタ」

今この場に誰かがいると分かつたとしても、別に驚きやしない。誰がいたって、俺には関係ないんだ。

話しつけてきたのは女性だった。オレンジ色の髪を腰の辺りまで伸ばし、右の頬には三角形の模様が描かれていた。

どことなく感じたことのある荒々しいというか、温かいというか。よく分からぬけど、初めて会つたのにそんな気がしない。

だけど、そんなことはもうどうでもいいんだ。

俺はもつ、何もかもがどうでもいいから。

「腑抜けなお前に名乗る名前などない」

「あつそ……。どうか行ってくれよ。俺はもつ、何もしたくないんだ」

「だから甘つたれてんなつて言つてるんだ」

女性は体を放り出している俺の胸ぐらをつかんで無理矢理起き上がりせると、俺の目を直視しながら言つてきた。

何だつてんだ、こいつは。甘つたれるも何も俺は、何もしたくないんだよ。戦うのも、修業するのも。

だいたい、俺が強くなる必要なんてどこにあるつて言つんだ。

くそつ、なんでこんな会つたばかりの女に甘つたれなんて言われ

ないといけないんだ。

平々凡々な世界から、こんな非常識な世界に連れてこられて甘つたれになるのも仕方ねえだろうが。

俺は胸ぐらを掴んでくる女性の手を掴み、叫ぶ。

「アンタに……アンタに何が分かるってんだ!! 戦いなんて知らなかつた俺が無理矢理ここに連れてこられて、死にそうな目に遇つてるんだ!! 見ず知らずのアンタに、とやかく言われる筋合いはねえんだ!!」

「だから甘つたれるなと言つておるんだ!!」

俺の叫びよりさらに大きな声で女が叫び返してきた。

空気が振動して、森が震えるのが素人の俺でも分かつた。女は俺が掴んだ手を振り払い、顔同士がくつつきそつた程に近付かせながら言つてきた。

「無理矢理連れてこられた? ふざけるなよ、小僧。お前は自分から望んでここに来たんだろうが」

「何を……言つて……」

「断ることなら出来ただろ。行き先も、『えられるものも分かつて尚、お前はここを選んだ。分かるか? ここに来たのはお前の意思だ。それを勝手だと? 無理矢理だと? 甘つたれるな!!』

……言つてみれば確かにそうだった。

殺されたのも、不老不死にされたのも間違いなく神の勝手だった。転生してもらうとも言つた。

だけど、確かに断ることも出来たんだ。

転生したくない、もう死んでもよかつたんだつて言えれば俺はここに来る必要はなかつたんだ。

そうしなかつたのは、まさしく俺の意思。

俺が自分の意思で転生することを望んでいたから、あの転生するときに俺は他の力を求めたんだ。

もうつた力は修業しなければ使えないものだつた。だけど、俺は確かに転生することを、見ず知らずのうちに望んでいたんだ。

だから俺は、ここにいる。

それを神のせいにしちまつのは責任の転嫁だ。

言われて初めて気付いた。

俺は主人公になれなくたつていいんだ。

俺はただ、ここにいるだけでいい。

「……ありがと」

「分かればいいんだ、分かれば」

女性は満足げに微笑んで頷くと、俺から手を話して一歩だけ離れた。

よし、もう悩む必要なんてない。ここにいるのは俺が望んだことだ。だつたら、やれるところまでやつてやる。

……と。頭が冷えて改めてやることにしたのはいいが、この女性はいつたい誰なんだ？

しかもなんか俺の転生したことについても知つてそうだし、どうなつてやがるんだ。

「で、アンタは誰なんだ？ その……俺の事情について知つてるみたいだけど

「なんだ、オレのことが分からぬのか？ 薄情な奴だな。こいつに来てからずっと一緒にいたのにな」

「ずっと一緒にいた……？ それってどういう意味だ？」

「まだ分からぬか。オレはレー・ヴァ・テインだ」

「は？ ええ

「！？」

俺の間抜けな叫びが、魔獣の森に木霊するのだった。

「……マジか？」

「本當だ。嘘をついてどうするといふんだ」

「いや、だつてさ……」

「信じられないのも仕方がないがな」

俺は目の前にいる女性から、信じ難い話を聞いた。

女性はどうやら本当に神から貰つた大剣、レーザーヴァテインという

ことらしい。

神に人間になれる機能をつけてもらつたとか言つてて、俺の面倒を見るように言われたらしい。

最初のうちに俺が気絶して崖から落ちたとき、助けてくれてたのはどうやらこいつだつたらしい。

この一週間に顔を出さなかつた理由はどこにまで一人で修業して、どこまで心を折らずにいられるかを見たかつたためらしい。

しかもこいつの予想よりも大分早く心が折れちまたから、がつかりしたなんて言われた。

……一週間保つただけでも良しとしてくれよ。

「甘えるな。オレが修業をつけてやるからには、そんな甘い考えはさせないからな」

「修業……？ アンタがつけてくれるのか？」

「当たり前だ。何のためにオレが来たと思つてるんだ？ 今日からみつちりオレの使い方、教えてやるからな」

そう言いながら俺を見下していく女性。

「怖い……。眼光が果てしなく怖い。」

人間じゃないけど、同じ人型でこんな眼光出来るもんなんだな。

「俺は龍崎桜牙……ってそれは知ってるか。で、俺はアンタのこと
はなんて呼べばいいんだ?」

「ヴァンだ。ヴァン・レー・ティ」

「ヴァン・レー・ティ……」

それってレー・ヴァ・テインの文字列を変えただけだよな?
なんて安直な名前なんだ……。別に文句があるわけじゃないから
どうでもいいけど。

俺がそんなことを考えていると、何故かヴァンに思いつきり頭を
殴られた。

「な、何すんだ!!」

「変なことを考えたな? いいか、修業中に他のことを考えてみる。
オレは容赦なくお前を殴り飛ばすからな」

覚悟しておけ、とヴァンは付け足したあと再び睨み付けてくる。
や、やつぱりこいつ、めちゃめちゃ怖い……。

俺は師事する人が出来たはいいものの、強くなるまで何回殴り飛
ばされないといけないのかを考えながら、憂鬱になるのだった。

次回から本格的な修業になります。

Ep10まで終わらせられたら幸いです……。

報告になりますが、旧式とはかなり違う話になると思います。オリジナルの話を結構盛り込んで、大戦期は介入しないで傍観の恐れがあります。

あとはミレアとセルキは出ない可能性大で、他のオリキャラを出したいと思つてます。

例えば主人公を慕う氷爆野郎とか、熱血漢の雷速野郎とか、唯我独尊の紫雲野郎とか、内気の疾風弓姫とか……です。

今のところ予定するのはこのくらいですが、とりあえず『氷』『雷』『雲』『風』のオリキャラと『炎』の主人公で話を進めます。他に属性で出してほしいのがありましたらオリキャラのアイデアを（殴

え、えー……。とりあえずEp10までは主人公とヴァンで進めるつもりです……。
では、感想待つてますーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176n/>

真祖の吸血鬼と業炎の剣帝～転生したネギま！での俺の戦記～
2011年10月10日13時57分発行